



Title	ブック・アート : 和綴じ豆本「布象嵌」・鬼本「かぞえうた」
Author(s)	福本, 繁樹
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53470
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブック・アート：和綴じ豆本「布象嵌」・鬼本「かぞえうた」

福本繁樹／大阪芸術大学

豆本／鬼本

インフォメーションメディアとしての紙と本は、電子メディアの発展により変革を迫られる一方で、知的、美的機能がより強く要求されるようになった。本をあらためてオブジェとみなし、さまざまな造形を試みる Book Art は、30年以上前にアメリカではじまり、現在では世界的に注目されているようだ。一方、染織作品の繊細なテクスチュアを生かしたスモール・ワークについては、国際的な展覧会が1970年代より世界各地でさかんに開催され、筆者も国内外の展覧会に出展したことがある。そのなかで、染色による平面作品がブック・アートに活用できるのではないか、また経師の伝統技法を応用する手作り和綴じ本こそ現代世界に対する意義を見いだせるのではないかと考えた。

アート・ブックでもブック・デザインでもない、ブック・アートをつくらうと思いついたのは、和綴じ製本の講習を受けたときだ。表具技法をすこし心得ていれば自分でできそうに思え、さっそく竹篋などの道具づくりからはじめた。大小の和綴じ本を試み、それぞれに布象嵌の小作品を編集、掲載した。独自の創作で展開している繊細な布象嵌の仕事は、微視的な観賞にも応えろと考え、より小さな豆本もてがけた。

本をつくるおもしろみには、本という手にできるほどの媒体に膨大な情報や労力をもちこめることがある。だから小さな豆本は格別だ。豆本は、江戸時代に雛本、芥子本などの称があり、中国では巾箱（きんそう）本、袖珍（しゅうちん）本、英語でも bibelot, bijou

book, dwarf book, Lilliput edition などの愛称があり、世界で愛書趣味に应运ってきたものであることを伺わせる。

豆本のつぎに手漉き和紙を最大限に利用した大型本にもとりくんだ。大型本の愛称をさがしたが、どうもみあたらない。そこで「鬼本」となづけた。豆本と鬼本の両方をてがけたが、やはり鬼は豆にかなわないのだろうかと思案をめぐらすこととなった。

豆本「布象嵌」

布象嵌とは、布の細片による切り嵌め／モザイク技法のことで、日本の表具技法が布象嵌の技法を可能とする。染色布を薄い和紙で裏打ちすれば、裁断しても生地が安定する。また布と和紙だから、裁断して裏打ち和紙で貼り合わせたものを、さらに繰り返し裁断して貼り合わせることができる。この方法によって幾何級数的に細かい構成による細密な造形を合理的に導きだすことができる。わたしは「数は質を変える」とばかりに布象嵌の細密さをエスカレートさせ、異次元の世界を求めてきた。

一重（ひとえ）、面一（つらいち）、盲目地の要素とともに象（かたち）を嵌める象嵌の行為は、つまるところ表面を敷きつめるという、サーフェス・デザインにその本質がある。なにごとつまってなければつまらない、それは李御寧氏が指摘した『「縮み」志向の日本人』の最たるものだろう。もちろん象（かたち）がつまっていればいいのではない。豆本には気品も、気色も、気韻も、気味も、気配も、氣勢もつまってなければならぬ。

鬼本「かぞえうた」

ニューギニア高地人の生活は、裸にペニスケースの装い、イモと野菜による一日一回の食事、ベッドも布団もないごろ寝などと、みかけは簡素だった。10本の手指と、特別な場合にはそれに10本の足指を加えて数を数える程度、それ以上になると「たくさん」という数字しかないという。「われわれの生は瑣末事によって徒消される。正直な人間はその十本の指を数える以上の必要はない」(H.D. ソロー『森の生活』)という意見はニューギニア高地で実践されている。

十進法の数字は人間の手指の対応によるものだ。日本には十まで数える「かぞえうた」が各地に伝えられている。「いちじくにんじんサンショにしそうごんぼにむかごなくさはじかみくねんぼにとうがらし」、「ひとよふたよみわたすよめごいつきてみてもなこのおびをやの字にむすびこをとおる」。かぞえうたは地方や時代によってさまざまなヴァリエーションがある。

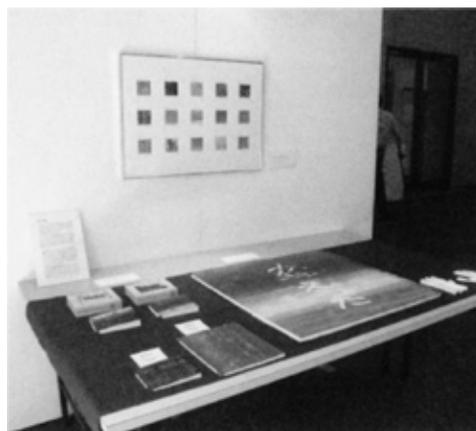
江戸後期の禅僧の良寛さんは毬つきがすきだった。真心尼が五里の山道をはるばる歩いて訪ねたとき、あいにく良寛さんは留守だったので手鞠をおみやげに残した。それに対して良寛さんが歌を返した。「つきてみよひいふみよいむなやここのとを十とをさめてまはじまるを」。真心尼はこの歌に仏のおしえがあると、いたく感動。それが二人の出会いを決定的なものとし、晩年の良寛さんの書や歌に明るさと華やぎをもたらした。

わたしは鬼本制作にかぞえうたをモチーフにした。まことの贅沢や豊かさは簡素で乏しいなかにあるのだろうか、かぞえうたに仏の道があるのだろうかなどと考えたからである。まあ、晩年のしあわせな良寛さんにあやかりたいという不純な動機が少しはあったかも知れないが……。十指の数で十分なほど簡素が

いいと、何万もの布の細片の象嵌で表現するのは、一種のオクシモロン（撞着語法）ではあろう。

豆本には巻末に、鬼本には別冊本にエッセイ集「逆言（およづれ）の戯言（たはごと）」を掲載した。27のエッセイの各タイトルを、布象嵌、布に刃物、はさみ、きりばめいろ（切嵌色）、表装／コラーージュ、カッターナイフ、一切、きわ（際）、のり（矩）、四角四面、インプロヴィゼーション、似而非なり、おもしろきオクシモロン、蠟染め、「藤纈染め」の誤り、藤纈の三大不思議、20世紀に再興した蠟染め、染色法、鉤勒填彩、琳派的なるもの、絵模様、60のキーワード、染み・むら・たらしこみ、SOMÉ、屏風、豆本／鬼本、かぞえうた、として、独自の創作論などを記した。それぞれのエッセイが全頁にきっちり「つまる」ように字数を調整した。扉のページなどには木版を用い、エッセイの一部の英訳文も用意した。

なお、本研究実施にあたっては、平成19、20年度塚本学院教育研究補助費を受けた。



左：豆本 125×145mm（桐箱 145×165×32mm 付き）2点
右：鬼本 770×720mm（付録 別冊エッセイ集 283×215mm）1点
壁面：額「Shredded Message '07」550×730mm（豆本掲載の布象嵌15点 各60×60mmを構成した参考作品）